

乾杯のご発声



内館でございます。

お酒がまわるまでの間に「なぜ三人一緒に大関になれなかったのか」という話をするつもりだったのですが、もう回り終えますね。ただ一つだけ、豊昇龍があんなにかわいい顔で無邪気に笑うと思いませんでした。なにせ叔父さんの朝青龍は私と天敵といわれましたから、豊昇龍はぜひ叔父さんの良くないところを学ばず、良いところを学んで立派な大関になって、あの笑顔で横綱に昇って欲しいと思っております。

皆様、長いこと本当に良いお仕事をなさってください、ありがとうございます。これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。

それではみなさまの今後のご活躍と、私たち皆が健康であることを祈って乾杯したいと思います。

乾杯！

表彰選考委員長 内館 牧子

祝賀会









受賞者手記目次

第59回社会貢献者表彰 受賞者30組（敬称略）

認定 NPO 法人 日本車椅子レクダンス協会	030
NPO 法人 岡山未成年後見支援センターえがお	032
浜松ねこシェルター	034
一般社団法人 青少年養育支援センター 陽氣会	036
NPO 法人 アジアの子どもたちの就学を支援する会	038
NPO 法人 あんだんて 女性サポートセンターIndah	040
のびのびスポーツクラブ	042
認定 NPO 法人 ALD の未来を考える会	044
NPO 法人 熊本どんぐり	046
一般社団法人 ヒューマンハーバー そんとく塾	048
NPO 法人 若者メンタルサポート協会	050
NPO 法人 Umi のいえ	052
MJI ホールディングス株式会社	054
株式会社 サンクラッド	056
認定 NPO 法人 オリーブの家	058
NPO 法人 バディチーム	060
株式会社 サポートジャングルクラブ	062
Jakarta Japan Network	064

認定 NPO 法人 ブリッジフォースマイル	066
北良株式会社	068
認定 NPO 法人 プラス・エデュケート	070
名護市学習支援教室 ぴゅあ	072
～犯罪被害者支援～ ひだまりの会 okinawa	074
NPO 法人 きもの笑福	076
認定 NPO 法人 ピッコラーレ	078
一般社団法人 コンパスナビ	080
北海道マルディコラ・ネパール教育基金	082
認定 NPO 法人 フリースペース たまりば	084
認定 NPO 法人 ベトナム子ども基金	086
フグ田 サザエ	088



対象となる功績内容

- ▶精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- ▶海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績
- ▶家庭で実子に限らず多くの子どもを養育されている功績

その他の功績

認定 NPO 法人 日本車椅子レクダンス協会



理事長
黒木 実馬

福岡県

高齢者や障がいのある人たちが楽しめるように、車椅子を活用した、社交ダンスやフォークダンス、レクリエーションダンスを完全無償ボランティアで行っている団体。元自衛官の黒木さんは17歳の時、自転車で旅行中、雨宿りで熊本県の障がい児支援施設に立ち寄って、その子どもたちと遊んだことがきっかけでボランティア活動に取組むようになった。その後も、自衛官として全国を転々としながら充実した人生を送るも、高齢者や障がい者支援施設を訪問、ボランティアを続けた。ある時、社交ダンスと出会い、「障がいの有無に関わらず、誰でも楽しめる」と感じ、車椅子の人と踊れるように車椅子社交ダンスを体系化、その後普及のために、インストラクター養成講座を開講、その様子がTVで取り上げられると話題になり、全国各地に支部が立ち上がった。さらに黒木さんは、動きやルールが複雑な社交ダンスよりも、シンプルな振付で気軽に参加してもらえる、レクリエーションダンス、車椅子レクダンスを発案。すると参加者が増加。誕生したインストラクターはこれまでに1万人以上、全国に448の支部を設立。会員の高齢化とコロナ禍で減少したが、まだ半数程度が活動している。日本レクリエーション協会での唯一の福祉レク専門の種目団体として、全国及び海外にも活動を広げている。

(推薦者：岡田 哲也)

とても名誉な賞を受賞しまして、深く感謝申し上げます。活動に対しましての何よりの励みとなります。誠に有難うございました。

私達の活動の原点でありますボランティア活動は、57年前に私が高校3年生の時、受験を防衛大学校だけに絞った事がきっかけで始まりました。受験が11月に終わって、3月の発表を待つ間、級友は受験勉強を続けているので、一人でサイクリング等で心身を鍛えていました。ある時、にわか雨に遭い、雨宿りした建物が特別養護学校でした。そこで、子供達との触れ合いの中から、自分は健康で体力もあり、とても恵まれていると実感しました。進学した後も、その学園に通うようになり、自衛隊でも継続し、障がいのある人に対して、支援することは人としての義務だと考えるようになりました。

全国の自衛隊で勤務しながら、やれる範囲でのボランティア活動をやってきました。その過程で、障がいがあると楽しめる種目に限りがあり、指導者も少ないという事に気付き、車椅子を利用したダンスを考案し、日本中で講習会を行って指導者を養成し、法人化して全国に支部を設立し、誰でもどこでもダンスが楽しめる社会環境を創って来ました。仲間は全国で、施設訪問等を楽しんでいます。

日本中を回って、448の支部と約1万人の指導者を創ってきましたが、27年経ちまして、仲間の高齢化及び今回のコロナ禍で、活動が縮小しています。今回の受賞がきっかけで、また活動が広まり、若者の後継者が誕生してくれることを願っています。

受賞に当たりまして、私と共に活動していただいております全国の会員の皆様、そ

してこれまで私の活動を身近で支えてくれた家族に、心より感謝申し上げます。今年迎えます金婚式の、良い思い出となりました。どうも有難うございました。



▲福岡での全国大会



▲インストラクターに資格証を付与



▲インストラクター養成講座風景



▲国内の施設訪問



▲生涯スポーツ功労者を受賞



▲車椅子レクダンスを楽しむ（青森全国大会）

NPO 法人 岡山未成年後見支援センターえがお



理事長
竹内 俊一

岡山県

岡山市で2012年に設立し、未成年者を対象とした後見人の活動を行っている国内初の団体。これまでに56人の子どもに携わってきた。成年後見人の場合、被後見人は老化や認知等に伴い財産管理をはじめとした支援が必要となることから助成制度が完備されている。一方、未成年は進学や就職を控えているなど、成人とは対応が全く違う他、後見人活動の助成が認められるには要件が厳しい。59人の会費で運営する厳しい状況であり、スタッフは弁護士、司法書士、行政書士、社会福祉士等の職業に就いている。未成年被後見人の支援は、児童養護施設や乳児院、学校からの要請に基づき行うため連携が求められる。親が居てもその親に障がいがある、虐待や育児放棄、反社会勢力との付き合いがある等のケースにも対応する。一人の被後見人に、心のケアを行う身上監護と、金銭管理等を中心とした財産管理を二人で担当する。18歳までが未成年となったが、その後も成年後見人等に引継ぎながら関わりを持ち続ける必要がある子どもが多い。後見人がいることで、被後見人が学校でいじめ等に遭った場合、専門的な対応に結びつくケースもある。また、活動に関する認知度を高めるためのフォーラムも、定期的に開催している。

(推薦者：認定 NPO 法人 おかやま入居支援センター)

1 平成23年に未成年後見が法人でも活動できるように民法の改正がなされたことを受けて、平成24年11月29日、全国で初めて未成年後見を法人で受けることを主目的とする「NPO 法人岡山未成年後見支援センターえがお」は設立されました。

参加者は、令和5年7月3日時点で、弁護士・司法書士・行政書士・税理士・社会福祉士・精神保健福祉士・保健師・臨床心理士・公認心理士・保育士・社会保険労務士など、正会員59名、賛助会員23名です。受任累計数は57人で、現時点でも、全国で唯一の未成年後見に特化した法人ということになります。

2 受任のルートは、児童相談所からと家庭裁判所からがほとんどです。個人での受任では対応が困難な事案の受け入れ先となっています。それぞれの事案について、各社会資源を繋げて支援チームを構築していき、本人の遭遇する課題について、チームビルドしていくというコンセプトで活動しています。

3 本人の特性としては、愛着障害や発達障害などを抱える子どもが多いですが、ひとりひとり自己肯定感を獲得するプロセスが、私としてもワクワクします。最近、ヤングケアラーの存在について、いろいろな知見が公表されていく中で、「えがお」が関わった事案にもヤングケアラーが存在することは判明し、その支援体制について、別法人（NPO 法人こども・若者支援センターもみの木）も設立しながら、取り組んでいます。

4 いずれにせよ、成人後に、自立できる人とそこまで達成できなかった人と分かれていますが、後者についても、何らかの支援体制に結びつけるようにしています。長い人生において、自己肯定感を持てるかどうかは、本人にとってとても大きな意味を

浜松ねこシェルター



シェルター長
服部 優二

静岡県

浜松市で建設不動産業を営む服部優二さんの長男が小学生だった時、家族に隠れて拾った子猫の世話をしていたことが近所の人に目撃されて発覚。服部さんは子猫を家族として迎え入れ、息子の心根に触れたこと、野良猫の現状を知ったことが動物保護への第一歩となった。巷の野良猫が存在する理由は、全て人間に起因するといわれ、日本における人間と猫たちの古くからの深い関係性を知り、今後の人生を野良猫たちのために！と、本業の傍ら2006年に本格的な保護活動を個人でスタートさせた。その後第2種動物取扱業の資格を取得し「浜松ねこシェルター」の運営を始め、現在は180匹を超える野良猫を会社と自宅に分けて収容し、病気の検査と治療、血液検査やワクチン接種、不妊去勢手術など新しい飼い主へいつでも譲渡できるよう準備している。決められた日に決められた場所で譲渡会を行うのではなく、希望に合わせていつでも個別に譲渡見学会を行えるようにしている。譲渡の申し込みがあると、人柄、育てる環境など、受入れ側の自宅の点検にも行くなど、猫が終の棲家を得られるよう、二度と野良猫にならないよう、心を砕いて愛情のこもった世話をしている。

(推薦者：学校法人 ムンド・デ・アレグリア学校 校長 松本 雅美)

先ずはこの賞を頂くにあたり、ご推薦者である、ムンド・デ・アレグリア学校 校長松本雅美様、ならびに公益財団法人 社会貢献支援財団関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

私共、浜松ねこシェルターの活動は15年余と短く、ボランティアの数も少数からなる小さな任意団体です。

そんな小さな立場ながら、野良猫の保護活動を継続してきた事で、名誉なるこの賞を授かるにあたり、素直に心より感謝申し上げる次第です。

今日まで野良猫の保護を継続出来たのは、妻のサポートがあつての事だと痛感しています。本来ならば受賞に一番相応しいのは妻であり、授賞式の参加には妻も同席する事を夢にみておりました。何分、例年を上回る子猫の受入れ依頼が増える状況の中、シェルター内にいる180匹を超す猫達の世話を絶やすことが出来ず、家内もその場から離れる事が出来ない理由から、妻不在の表彰式出席を残念に思います。

先にも触れましたが、今年子猫の受け入れ依頼が増加し、例年であればピークを過ぎた頃にも拘らず、未だに依頼の電話が絶えません。

常々より全ての依頼に応えたいと考えていますが、何分にもシェルター内のキャパシティーにも限界があり、施設を運営する費用確保、維持管理する上で必要となる人員であるボランティアさんの確保、それらが思い通りにはならず。どれも私と妻が努力したところで解消させられる問題ではありません。

その様な状況が現在の浜松ねこシェルターというのが正直なところです。

その点、国は行政機関の犬、猫受け入れ口なる部署では、キャパを超過した場合、



即座に殺処分という安易な手法で間引きが出来、己の保身をする事が出来ます。

私たち小さな命を重んじる民間の者達は、その様な対応は出来るわけがないのです。

この先、浜松ねこシェルターとして進む方向は、数十年先でも浜松ねこシェルターは存続していなければならず、次の世代に継承させなければならない。という務めがあると考えます。

その結果が、殺処分を減らし、生命の尊さ、情操の観念を受持する事により、古き日本の精神を思い起こす、利己ではなく利他たる思いやりのある社会を作りだせるのだ。

そのように考えます。

後継となるべき人材の育成、今まで以上に小さな命を守る行動と活動に尽力を注ぎ、これからもずっと先まで、浜松ねこシェルターの運営を行って参ります。

この受賞を励みに、更に一步前に踏み出し日々精進して参る次第です。

最後にこの度は栄えある表彰を賜り誠にありがとうございました。



▲ 餌やりで繁殖してしまった子たちを捕獲



▲ 無責任な餌やりの結果 神社に住む子ねこたち



▲ 保護されたねこたちが飼いねこになった瞬間



▲ 保護した子ねこの給餌の様子



▲ 保護した子ねこの様子



▲ 無責任な餌やりの結果 神社に住む子ねこたち

一般社団法人 青少年養育支援センター 陽気会



代表理事
杉江 健二

愛知県

「すべての親に子育ての喜びを、すべての子どもに“生かしの道”」をミッションとして①青少年育成活動 ②不登校・ひきこもり支援 ③親支援の3つの柱で事業を行い、児童虐待防止活動に取り組む団体。代表を務める杉江健二さんは養育里親として50人以上の子どもたちと暮してきた。2010年自宅の目前に児童相談所が建ち、そこから聞こえてくる親を求めて泣き叫ぶ子どもの声などを聞くうちに、本当の児童福祉とは、親に虐待される子どもたちや里親宅に来るような子どもたちをこの社会から減らしていくことではないかと考えるようになった。児童虐待の発生予防と再発防止の取り組みには親への教育が必要だと考え、多くの悩める親の声に耳を傾け、どうすれば叩いたり怒鳴ったりせずに子どもを育てられるのか、どうにか子育ての負担を軽減できないものかを考察して、独自の「SS 式イライラしない子育て法[®]」（通称：CPA）を開発。子育て中の親や支援者に向けた「イライラしない子育て講座」や指導者の養成講座を開催している。2015年からは全国で初めて、児童虐待再発防止を目的とする「名古屋市児童相談所における保護者支援事業」を行っている。

(推薦者：NPO 法人 スペース海 理事長 新田 恒夫)

この度は身に余る賞をいただき、さらにはレセプション・式典において親心すら感じる温かく心のこもったおもてなしを頂戴し誠にありがとうございました。こうした表彰の榮に浴することができ、活動を共にする仲間と共にたいへん感激しております。これも当会の活動を長年ご支援頂いた多くの関係者の皆様とこの活動を評価いただいた社会貢献支援財団様のお陰と心より感謝申し上げます。

私共は「すべての親に子育ての喜びを、すべての子どもに“生かしの道”を」をミッションとして、日本中の子どもたちの笑顔を守るため、「児童虐待0（ゼロ）」を目指し名古屋市を中心に活動を展開してきました。

日本の児童虐待（児童虐待相談対応件数）は、厚生労働省が統計を開始した平成2年度から現在までの約30年間、一度たりとも減少した年はなく、減少するどころか約200倍にも増加してしまっています。少子化の影響により1年間の出生数が80万人を下回るこの日本において、令和3年度には児童虐待相談対応件数がなんと20万件を超えているのが実状です。

児童虐待をしてしまった親（保護者）に対し、「ヒドイ親が子どもにヒドイことをした！」と社会が後ろ指を指しているだけでは、児童虐待を減らすことはできません。なぜならば、子どもを虐待してしまう多くの親は、かつては自分も幼少期に親から虐待を受けて育ったというケースも多く、子どもを怒鳴る、叩くなどの不適切な育て方しか経験したことがないからです。そうした親に対し「子どもを虐待してはダメ！」と説くだけでは、児童虐待の発生を減らすことはできません。子どもを怒鳴る叩く以外の適切な方法で育てる仕方を学べる場所、機会の提供が必要だと思います。

核家族化が進み、子育ての継承や周囲のサポートが不十分な現代、益々ワンオペ育児で親の負担感が増大しています。当会では、独自に開発した「SS式イライラしない子育て法[®]」(Communicative Parenting Approach 通称CPA)を学ぶ「イライラしない子育て講座」の啓蒙・普及を通して、一人でも多くの親に適切な子育ての仕方を学べる場所、機会を増やしていき今後積極的に活動を展開してまいります。

この度の社会貢献者表彰の受賞は、こうした動きをさらに加速させていこうと動き始めた私達にとって大きな励みを与えていただきました。

この度は誠にありがとうございました。



▲児童虐待再発防止カウンセリング



▲子育て支援者養成講座



▲児童虐待防止啓発活動ボランティア



▲「産前子育て教室」制度化街頭署名活動



▲イライラしない子育て講座



▲子ども政策担当大臣へ署名提出

NPO 法人 アジアの子どもたちの就学を支援する会



理事長
大沼 陽子

東京都

2002年に創設者の長谷川安年さんが、カンボジアで目にした朽ちた校舎で学ぶ子どもたちを支援しようと決意、2007年カンボジアの困窮する地域の教育支援を開始。現在までに13校の校舎を、貧困地区であるシェムリアップ州バンティアスレイ郡・ソニコム郡などに寄贈した。長谷川さんから活動を引き継いだ理事長大沼陽子さんは、そのすべてを定期的に訪問し、修理の必要な箇所を点検して修理依頼や衛生環境の維持、学校運営などへの経済的支援、人材育成支援などを継続して行っている。さらに教師の能力向上にも力を入れており、音楽や体育など、同国ではほとんど行われていない情操教育の導入を促してきた。これらの現場に必要なきめ細かい支援により、支援校での未就学児童はいなくなり、郡の人気を誇るベスト校に選ばれている。また、困窮する母親を経済的に支えるために“Mother to Mother”と題し、日本の幼稚園や小学校で使うコップ袋や手提げバッグを、日本の母親たちに代わり現地の母親たちに縫ってもらい、それを日本の母親たちが購入することでカンボジアの母親たちに工賃を払って支えるプロジェクトを2008年から実施している。

(推薦者：根岸 恒次)

この度「社会貢献者表彰」という大変名誉ある賞を頂戴いたしました。この受賞は、日々私たちの活動を様々な形で支えてくださる方々と、多くのボランティアの皆様のおかげです。深く感謝の意を込めてお礼申し上げます。

カンボジアへの支援活動のきっかけとなったのは、前理事長長谷川安年が2006年にカンボジアを訪れた際、内戦の影響で多くの子どもたちが教育の機会を失っている現状を目の当たりにしたことです。同氏は東京都あきる野市にて幼稚園を経営する教育者として何かできることはないかと考え、小学校の校舎を寄贈しこの活動をスタートしました。娘である私も、現地で村の母親が誰も文字が読めないという現状に衝撃を受け活動を共にし、父亡き後を引き継ぎました。

ポルポト政権下における「知識人の大虐殺」で崩壊したカンボジアの教育現場は、校舎があれば子ども達が学べるというものではありません。私たちは校舎寄贈後、教材や教具の提供、学校運営の為の資金援助、先生への経済援助、教員の技術向上支援といった多岐にわたる運営支援を継続してきました。発足から16年、学校校舎16校を寄贈してきた中からは地域の最優秀校に選ばれるまでになった学校もでてきております。

活動の中で私たちが特に注力しているのは、「Mother to Mother 活動」という日本とカンボジアのお母さんを繋ぐフェアトレード支援事業です。カンボジアの貧困地域では子どもに教育が必要とわかりながらも、経済的な困難から学校を中退させてしまう家庭が多くあります。一方日本では子どもの入園・入学に備え、裁縫に不慣れた母親が布小物を手作りするのに苦勞しているという現実があります。『日本のお母さんたちに代わってカンボジアの貧困層のお母さんたちに日本の幼稚園や学校で使う布小

物を縫ってもらおう』ことで、助け合って問題を解決する取り組みが、「Mother to Mother 活動」です。

教育を受けていないお母さん達に仕事を教えるのは困難の連続でしたが、現在カンボジアのお母さんたちが丹念に手作りした品は、都内を中心の幼稚園や保育園、学校そしてインターネット販売を通じて、日本全国のお母さん達に届けられ、収益はカンボジアの母親たちに子どもの教育費として直接還元されています。

現在の目標は、「活動を引き継ぎたい」と活動のバトンを渡す次世代の方が現れるよう、持続可能な体制を進めることです。今回の表彰も糧にして更なる支援活動を進めて参ります。皆様の変わらぬご支援を、心よりお願い申し上げます。



▲Mother to Mother の製品を日本で販売するときの様子



▲Mother to Mother 活動で作ったものを手にするカンボジアの母親



▲Mother to Mother 活動の縫い物に取り組むカンボジアの母親たち



▲プレゼントしたピアノカを使っての音楽の授業の様子



▲寄贈校の前で



▲自転車を持たない子へ自転車を寄贈する様子



▲新一年生に制服をプレゼント

NPO 法人 あんだんて 女性サポートセンターIndah



代表
小嶋 洋子

神奈川県

NPO 法人あんだんてが運営する「女性サポートセンターIndah（インダー）」は、幼少期の家庭環境の複雑さや、男性からのDV被害の経験などで、アルコールや薬物、摂食障害等の問題を抱える依存症の女性を対象に、回復プログラムや居場所の提供を通して、心の痛みに寄り添い、支援する団体である。依存症になる経緯は、男性の場合、社会に出てからのお酒の付き合いやストレスからが多く、女性の場合は、幼少期の親の虐待や、男性からのDVなど複雑な背景があると言われる。代表の小嶋洋子さんも薬物とアルコール依存症回復者であり、男女ともに受け入れる依存症回復支援施設で職員としてかかわった際、女性特有の回復の難しさに直面。そこで、女性に合った支援のあり方を考えて、2012年にNPO 法人あんだんてを設立し、神奈川県ではじめての女性専用依存症回復施設 Indah を設立した。グループミーティングをはじめ、個別相談、生活支援、創作、農作業、季節ごとのイベントの開催や家族会を通して、回復支援を行っている。2022年時点で延べ20,000名の当事者女性と家族を支えている。

（推薦者：NABA（日本アノレキシア・ブリアミア協会））

この度は、大変光栄なご表彰をいただき、誠にありがとうございます。

私たち Indah（インダー）は、女性専用の依存症回復施設として、プログラムや居場所を提供することで、女性の回復を支援する活動を行ってきました。

私自身も依存症回復者であり、同時に依存症の家族です。依存症の当事者として私自身が施設につながったのは1993年。99年から男女を対象とした支援施設で職員として働くようになりました。当初は「依存症という病気に、男も女も関係ない」と思っていた私も、いざ現場でスタッフとして働く中で、すぐ壁にぶつかることになりました。

まず従来の依存症回復プログラムでは、修了のために必要なミーティング回数が多く、家事や育児を担う女性がそのすべてに参加することが難しい。しかも性暴力被害の経験がある女性の中には、男性と同じ場に参加することに恐怖を感じる方もいました。また女性の依存症の場合、処方薬依存や摂食障害を併発するなど「クロスアディクション」と呼ばれる状況に陥りやすいこともわかってきました。お酒や薬物への依存をやめても、その先に女性たちが安心できる環境がなければいけない。女性には女性に合わせた支援が必要だ。そう実感するようになりました。

そうして2012年に、神奈川県ではじめての女性専用施設 Indah を立ち上げます。

Indah のモットーは、「仲間と楽しむこと」です。女性だけの場所で、長い時間をかけて安心感を育ててほしい。そして、女性たちのそれぞれの生活の事情に合わせた支援をし、地域で彼女たちが安心して暮らすための安心な居場所をつくりたい。そんな思いで活動を続けています。

依存症は世代間で連鎖する問題も深刻で、子どもたちへの包括的な支援が必要です。



現状の制度内だと、依存症当事者である母親向けのプログラムはありますが、母子で楽しめるものは充分とは言えません。今後はこうした子供向けのプログラムの充実も目標にしております。

Indah の立ち上げは容易ではなく、地元住民から施設への反対の声が上がるなど、依存症へのスティグマの根深さにも苦勞しました。今回、このような光榮な賞をいただき、私たちの取り組みが評価されたのだと、大変嬉しく思っております。

最後に、この賞を受けるにあたり、Indah のスタッフ、支援者に深く感謝いたします。



▲江ノ島合宿



▲作業療法（切り絵）



▲10周年セミナー



▲アクセサリー作り（レジン）



▲芋ほり



▲教会バザー

のびのびスポーツクラブ



代表指導員
青木 和男

大阪府

40年前、障がいのある子どもへの支援や、社会の理解もまだ少ない時代に「ハンディキャップのある子どもたちに運動の機会を！」と、熱い思いをもった3人の保護者が、当時、学校の教職員だった青木和男さんに向け合い、昭和57年7月に発足したのが、保護者（親）主体の「池田市障がい児（者）親子スポーツクラブ」、現在の「のびのびスポーツクラブ」である。愛称「のびスポ」は、子どもの気持ちファーストで、運動を楽しんでもらうこと、保護者にも運動を通して、子どもとの関わりを密にしてもらうこと、保護者同士の交流の場でもあることを目的に活動している。子どもたちは「のびスポ」を通して、運動を楽しみながら「思いやり」「できる喜び」を学び「自主性」の心も育っている。40年間、世代が変わりつつも、常に30～40家族が参加し、関わった人数は延べ2,800名以上である。さらに、保護者、指導員、ボランティアの全面協力のもと、イベントや旅行を随時開催。キャンプやスキー教室、山登り、クリスマス大会などを実施している。関わってきた学生ボランティアが支援学校の教職員になったり、保護者から社会福祉士や相談員が誕生するなど、障がい児支援や地域支援に活躍する人材育成の場にもなっている。子どもたちの笑顔、保護者の熱い思い、スタッフ・仲間の情熱に支えられ「つながり」を大切に活動が続けられている。

（推薦者：佐藤 輝子）

子ども達の笑顔に包まれて40周年の記念式典を終え、その嬉しさの余韻が残っている中、今回の受賞の連絡をいただき関係者一同喜びに堪えません。

発足当時の40年余り前、学校週休2制に向かう時期でした。障害児を持つ家族への支援や仕組みが充実していない中、休日や余暇時間が増えても障害を持った子ども達は家で過ごすことが多くなることを想定し、少しでも体を動かすことができる機会を作ろうと保護者の熱い想いで発足した「のびのびスポーツクラブ」。当初は「池田市障害児（者）親子体操教室」という名称で、いろいろな人とふれあいながら親子で楽しく体を動かし「子ども同士・保護者同士のつながりを大切に」をモットーに自主運営を基盤に始まりました。活動拠点も、小学校の体育館から、市の支援をいただいて「総合スポーツセンター」に移り、安定した活動を続けることができました。現在は、会員の年齢幅も大きくなり「就学前・小学生」と「中学生以上」の2つのグループに分かれて実施しています。

「おはようございます！」笑顔いっぱいの子どもの元気な声で始まり「またね！」爽やかな表情でのハイタッチで締めくくる光景は40年の歳月が流れた今も変わりなく続いています。音楽に合わせて歩いたり走ったり・手具や用具を使った運動・平均台を使ったサーキット・リズムダンス・ミニスポーティゲーム等「みんなで運動する楽しさ」を共有しながら、運動を通して発達支援（自主性・社会性・コミュニケーション力等）に繋がるいろいろな力を培っています。「やった」「できた」と言って喜ぶ子ども達の「素敵な笑顔」に支えられ「継続は力なり」の言葉をかみしめ活動を続けてい

ます。

この間、学校での支援教育の在り方や福祉施策も随分と変容し、障害者理解も進み「子育てサポート」や「自立支援」等の取り組みも多角的に展開され、様々な「支援システムの充実」が始まっています。子ども達も運動だけでなく余暇時間を個々の興味や関心のあるサークル活動等に積極的に参加する基盤ができています。また、発足当時から家族ぐるみの活動として「登山」「スキー」「ボーリング」「ハイキング」「地域イベント」等、なかなか家族だけで行くのが難しかった旅行やイベントも積極的に企画し、現在も子ども達の「楽しいな活動」として継続しています。

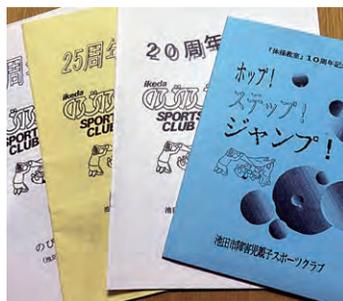
指導スタッフも教員・ボランティア・学生等と広がり、子ども達とふれあいながら「支援の在り方」を学び、教育や福祉関係の道に歩む方もあり、人材育成の場にもなっているようです。

子ども達の運動は勿論のこと「子育て相談や情報交換(座談会)」も気軽に行なわれ、人と人が繋がる居場所として「あったか時間・あったか空間・あったか言葉」を大切にしています。

今回の受賞を次へのステップとし、これからも「こどもファースト」をモットーにみんなの力で継続発展させていきたいと思っています。



▲2021年11月24日 秋のハイキングイベント 池田市五月山秀望台



▲10周年から5年毎に記念式典を行いました。2022年に40周年を迎えることが出来ました。



▲2019年1月26日 雪遊びツアー 若杉高原おおよスキー場



▲2022年12月24日 40周年記念式典 クリスマス会 集合写真



▲2023年3月11日 40周年記念イベント「生きてるミュージアム」ニフレル見学 千里万博公園 EXPOCITY



▲子どももおとなもみんなで行うパルーン! ダイナミックに動かします



▲設立当初より行っている平均台やトンネルを使ったサーキット!!

認定 NPO 法人 ALD の未来を考える会



理事長
本間 りえ

東京都

ALD（副腎白質ジストロフィー）とは、主に遺伝子の変異により起こり、脳や脊髄、副腎の機能が失われ様々な症状を呈する特定疾患（難病）である。小児型、思春期型、成人大脳型等に分類されるが、主に小児期の男児に発症する。一般的に ALD は、初期症状が多様で、確定診断に時間を有し、この間に病気が進行することが少なくない。ほとんどの場合、一年以内に生命を落とすことも。本間りえさんのご子息は6歳の時に ALD を発症。造血幹細胞移植を行うが、術後の副反応がひどく、壮絶な介護となった。その後「なんとしても息子を守る」という強い意志のもと、周囲の大反対を押し切って、在宅介護を始めた。インターネットも普及していない時代に、ALD の家族会を探すのが、国内にはなかったことから、同じ悩みを持った者同士が集まる場所を作ろうと、2000年「ALD 親の会」を発足、2012年に NPO 法人「ALD の未来を考える会」を設立し理事長を務める。（2021年11月認定 NPO 法人化）ALD の治療や介護生活に関する情報などの発信、患者家族のピアカウンセリングや生活支援、一般の方に向けての普及と啓発活動、医療・研究機関との情報交換、海外の患者会や医師との交流など活動は多岐に渡る。また医学・看護・福祉に関係する大学、学会での講演活動にも力を入れている。更に ALD の早期発見、早期治療に有効な新生児スクリーニングを日本全国の赤ちゃんが公費で受けられるように働きかけを行っている。

（推薦者：公益財団法人 そらぶちキッズキャンプ 代表理事 細谷 亮太）

今回、私共の活動をご理解くださりこのような光栄な賞を頂いたこと、貴財団のみなさま、これまで参加・支援して下さった方々、そして、推薦して下さった細谷亮太先生に、改めて心より感謝申し上げます。

「ALD（副腎白質ジストロフィー）」をご存知でしょうか。国から指定難病とされている X 連鎖性遺伝性疾患です。

発症時期は小児から成人まで幅広く、発症年齢や症状により様々な病型に分かれています。小児の場合、発症後は急速に進行し数年で寝たきりとなることもあり、早期診断がとても大切です。一方で、発症まではごく普通に生活を送ることができるため、自身がまさか保因者であるとはわからないことが多く、その初発症状も病型により多様なため、多くの場合発症から診断に至るまでとても長い年月がかかっています。

私の場合も例外ではありませんでした。今から28年前、6歳になった息子は ALD を発症しました。はじめは病気とは疑いもしませんでした。日に日に表情も乏しくなり…ようやくついた診断が初めて知る難病。X 連鎖遺伝とはいえ、患者や保因者が必ず発症するとは限りません。しかし、遺伝性疾患には、未だ多くの偏見や差別がつきまとい「自分のせいで子が病気に」と母親が自分を責めてしまうことが多くあります。私自身も悶々とした時期が長くありました。「同じ苦しみを経験する人が1人でも減るように」目の前で変化していく息子を抱きながら、私は決心しました。

それまでの思いから、2000年に患者会を立ち上げました。「声を聴き寄り添う」と

いう想いは当初から変わらず、疾患啓発、家族支援、研究支援の三つを柱に、様々な活動を進めています。

近年は、ALDのみでなく、似た悩みを抱える先天代謝異常症全般に対象を広げ、長年行ってきたピアカウンセリングにも力を入れています。日々の生活や慣れない介護で、当事者・介護者が孤立しないよう、私たちの活動がご家族を取り持つ綱になっていけたらと思います。

研究も進み、早期診断のための新生児スクリーニングが岐阜大学からスタートし、次いで愛知・三重・石川・福井などでも実施が実現しています。全国の新生児が対象となるよう、啓発活動をしてまいります。

私の息子も、もしあと半年早く診断され治療ができていたら、今は元気に社会生活を送ることができていたでしょう。いつか疾患発症がゼロとなり、私たちの活動や患者会が必要なくなる未来がくることを目指し、止まらず活動してまいります。



▲ 家族支援：勉強会のようす



▲ 10月2日は「ALDの日」！ SNSを活用したチャリティイベントを行いました



▲ 疾患啓発：展示のようす



▲ ALD について知る



▲ ハンドブック 医療的ケアの必要な方のための災害対策

NPO 法人 熊本どんぐり



代表理事
松永 佳子

熊本県

学ぶ・働く女性が輝く社会の整備が整う一方で取り残されている女性たちのために、女性の支援に特化した活動を、2019年から熊本市で行っている。2013年に開設された前身の団体は男性を主とした自立準備ホームを運営しており、手伝いをしていた松永佳子さんは女性の支援もしたいと考えていた。松永さんの本業はエステサロンの経営だったが、客と施設に来る人の生活の落差と、施設の女性へのサポートがまったく足りてないことに心を痛めていた。エステ経営は私でなくてもやる人は沢山いるが、この施設の運営に手をあげる人はいないと考えた松永さんは、前代表が高齢で引退するのを機に女性支援に特化することし活動を引き継ぐ事にした。松永さんが代表に就任後、DVの被害者や、刑務所の出所者、貧困のため生活が立ち行かない人といった社会から孤立した女性たちに寄り添い、女性サポートシェルターGrowth、グループホームミモザの木、縁側 CAFE LUPINUS（ルピナス）の運営等を行っている。また、自立した女性のその後の生活に寄り添って、社会に馴染めるように併走することを忘れない。

(推薦者：NPO 法人 ダルク女性ハウス 施設長 上岡 陽江)

この度は栄えある社会貢献者表彰を受賞させていただき誠に有難うございました。

スポットライトのきらめきとは対極にある日々の活動に光を当てていただけたことで今まで悩みながら歩んできた日々が報われたような気持ちでした。また、授賞式では全国各地で社会貢献者の方々が様々な分野で活躍されていることを知り、とても心強く感じ、感銘を受けました。

素晴らしい出会いと機会の場を与えていただいた貴財団と財団関係者の皆様に感謝致します。

当法人は様々な困難を抱えた女性とその子ども達が安全な居場所を持ちながら、地域で安心して暮らせるよう包括的なサポートを行っています。2022年度は15名のご入居があり、41名のご相談に対応しました。

刑務所を出所した女性や裁判で実刑にならなかったものの地域で暮らすには支援を必要とする女性の場合は自立準備ホーム、知的・精神疾患などの障がいがある女性の場合は共同生活援助（グループホーム）、DV・虐待被害や生活困窮等で住まいのない女性の場合は民間シェルターでそれぞれ支援を行っています。

支援の内容は、転入手続き、生活保護や住基ロック、障がい者手帳・障害年金等の申請同行、受診予約と同行、物件内覧同行と引っ越しの手伝い、法テラスやハローワークへのつなぎや同行支援、各種関係機関との連絡調整など多岐に渡り、ひとりひとりのニーズと能力に合わせて地域で暮らすための準備を一緒に行います。

また、日中の居場所としてダンスやハンドメイドなどのワークショップ、よろず相談を実施することで退所後も伴走的にサポートを行っていますが、中には連絡が途絶えてしまう方も多くその後再犯したと連絡が来ることもあり、つながり続けることは

課題のひとつです。

今後は、様々な困難を抱えた女性たちの得意なことや興味のあることを活かしながら働ける場を提供することで、安全な環境の中で自立に向けた生活ができるよう自立支援事業を充実させていきたいと考えています。

資金面や人材など課題は山積していますが、実現に向け一歩ずつ歩みを進めたいと思います。

今後とも、ご支援、ご協力賜りますようよろしくお願い申し上げます。



▲フラダンス体験



▲縁側 cafe ルビナス



▲押し花しおり作り



▲出来上がった押し花しおり



▲はあもにいマルシェ参加の様子



▲ハンドメイド雑貨製作

一般社団法人 ヒューマンハーバー そんとく塾



代表理事
副島 勲

福岡県

不動産仲介業を営みつつ保護司として20年間無給で再犯者のサポートをしてきた副島勲さんは、出所者が直面する課題を目の当たりにし、更生を支援し円滑な社会復帰に導こうと株式会社ヒューマンハーバーを設立。再犯防止には、就労・教育・宿泊の3つが重要と考え、スクラップの買取業・産業廃棄物の中間処理業を興し、その収益をもとに教育と宿泊の支援を行っている。特に出所者にはそれまでの環境で得られなかった教育が欠けていると感じた副島さんは「視点を変えてあげること」「気づきを与える機会」として、一般社団法人ヒューマンハーバーそんとく塾を開校。「そんとく塾」では、社会で日常生活をする上で必要な基礎的な知識を身に付けたり、臨床心理士によるカウンセリングや保護司・教育関係者・社会福祉関係者・経済界などの有識者の講話・コーチングをすることで自己に目覚め・気づきを与える指導を実施していく。半年から1年で卒業し社会に巣立つ。卒業者はこれまでに65人。中には、リサイクル事業者として独立自営をはじめた人もいる。刑務所では、受刑者1人当たり年間350万円のコストがかかる。1人が罪を犯すと、逮捕から判決までのコストは2,000万円にもなり、これらはすべて税金。再犯を防止すればそれだけの税金の無駄づかいが減り、出所者が働けば税金の浪費者から納税者になる。再犯させない仕組みをもっと大きく広げていこうと考えている。

作家の吉川英治氏は「我以外皆師なり」と、また宮本武蔵の中では「我事において後悔せず」の名言があります。

表彰者の方々の活動から、この言葉の深さ・重さを実感致しました。

各々の分野での活動状況を拝聴し「上には上が居るもんだ」感動と感激で魂の底からゆさぶられた思いで学びました。

弊社団で取り組みをしています「再犯を起こさせない仕組みづくり」は新たな加害者と被害者を生み出さない、重要な任務であると再認識し、納税者を育てるメーカーに成ると固く決意した次第です。

「一隅を照らすこれ国宝なり」の教えを、さらに国宝を産み出す、公益財団法人 社会貢献支援財団様の、きめ細く、至れり尽くされるご支援に只、唯、頭の下がる思いと感謝で一杯です。

「至幸至福」を満喫させて頂きました。

ありがとうございます。

結びに「道徳無き経済は罪悪であり」「経済無き道徳は寝言である」二宮尊徳の名言です。

利益の最大化を目指す企業もあり、社会課題を解決しようとする「天道無私」の心を持つ企業家には、貴財団の存在は「国宝」であると実感致しております。

ご縁を頂きましたことに深く深く心より感謝申し上げます。

安倍昭恵会長様ありがとうございます。



▲職親プロジェクト熊本支部発足式



▲職親プロジェクト福岡会議



▲服役経験者への講話



▲福岡経済同友会講演



▲福岡市早良区人権研修会講演



▲香椎東人尊教講演

NPO 法人 若者メンタルサポート協会

東京都



理事長
小杉 沙織

生きづらさを抱える子どもの気持ちに寄り添う活動を行おうと、小杉沙織さんが2012年より活動を開始し、2015年にNPO法人を設立し40名のボランティアスタッフとともに24時間のLINE相談に対応している。小杉さんは子どもの心理や現状を伝える専門家として全国での講演や、渋谷クロスFMでラジオパーソナリティとして若者の声を伝えるなど、様々なSOS行動をする若者をタイプ別に分析したオリジナルメソッドでの講座も好評を博しており、カウンセラーの育成にも力を注いでいる。コロナ禍では、每晚「オンライン居場所」を開設し、コミュニケーション不足で不安を抱える若者たちの心の拠り所となっている。若者の声を聞いていると、10代で児童相談所等での保護を望んでいる子どもは多くない。それ故に街をさまよひ歩いたり、危険な勧誘に乗ってしまったりということが少なくない。相談者の殆どは両親が不仲であったり、ヤングケアラーであったり、親からの愛情が少ない家庭環境に恵まれていない子どもたちで、親に言えない悩みを相談してくる。そのひとりひとりに相談員が担当制で対応し、連日同じ人が悩みに寄りそうことで相談者に安心感を持ってもらう。一方で依存関係にならないようなチェックシステムや研修を実施し、子どもたちの自立を目標とし、理念を掲げ活動を行っている。

(推薦者：中村 俊也)

日本は長く「子どもの自殺率」が世界一という悲しい記録を更新しています。

私自身が家にもどこにも居場所がない幼少期と思春期を過ごし、居場所のない孤独感が若者たちにとってどれだけ苦しく生きづらいものかということ、身をもって感じてきました。

それを乗り越えた経験を活かして、2012年にブログを立ち上げそこに自身の生い立ちと心が楽になるメッセージと連絡先を書いて「同じようにひとりで泣いている子がいたら連絡して」と始めたのが今の活動の原点でした。

「死にたい」と深夜に若者たちから届くメッセージに一人一人寄り添い、その気持ちを受け止める…気持ちが分かるからこそ、その死にたい気持ちを無闇に止めたりはしない。ただ「そんな辛い環境でよく頑張っているね、本当に偉い！」と私自身が彼らに感じる気持ちを伝え続けてきました。

勿論この10年は順風満帆ではなく、寄付金が毎月3万円という状況が長く続き、今も20万円に満たない寄付金で自費を投入しながら活動を続けています。誤解を受けること、足を引っ張られることもある中で、何度辞めたほうがいいのかと心折れそうになったかわかりません。それでもこうして続けてこられたのは「沙織さんが居るから生きています」「沙織さんに会うために頑張っています」と辛い環境の中でも前を向いた子たちからの言葉でした。

草の根活動は対象者の人たちから厚い信頼を受けることはできても、中々社会から認めてもらえる機会がありません。でも、その一番大切な対象者の人、私たちでいう



若者からの感謝の声やそうした言葉をもらうことが私たちにとっては何よりも大きな大きなギフトでありやり甲斐でもあります。

そんな10年の活動の中で、この度このような貴重な賞をいただきましたことは私にとっても団体にとっても、そして私たちを頼ってくれる若者たちにとっても大きな励みとなるものでした。

今もこうしている時間に、日本のどこかで生きることに苦しみしか見出せず居場所がなくひとり泣いている若者たちが多く存在しています。

でも諦めずに生きていたら、自分を誰よりも大切に生きていたら、人生は大きく変わることを、居場所は必ず作れることを、私自身の人生や体験を元に多くの若者たちに伝えていけたらと思います。

そしてこの表彰式で私を感じた、そんな想いを持った大人はまだまだ沢山いること、そんな大人と出会って欲しいということも、これから伝えていきたいと思っています。この度は本当にありがとうございました。



▲赤坂ロータリークラブの招待による、相談者の若者とのイベント



▲実際の LINE 相談



▲相談者の若者たちとの体験学習（相談員による屋内ワークショップ）

NPO 法人 Umi のいえ



代表理事
齋藤 麻紀子

神奈川県

2005年産科医師不足や、産科の閉鎖が全国的に広がるとともに、安全ではない産科医療が社会問題となり、健全なお産環境の維持に、代表の齋藤麻紀子さんは危機感を抱くようになる。母親同士がつながり、健康に妊娠期を過ごし、元気に赤ちゃんを産み、育てられるように、2007年に「Umi のいえ」をスタート。「産んでよかった、生まれてきてよかった、生きててよかったと思える社会をつくる」をビジョンに、出産子育ての学び場、生きづらさを感じる時の駆け込み場として、育児支援と母子支援者向けの啓発事業を中心に行っている。助産師や医療者、専門家による産前産後に関する講座をはじめ、子育て、セルフケア、食育、命、性教育など、月に25ほどの講座の開催、出産当事者同士が語る会や、手縫いや編み物といったハンドメイドや歌や楽器などで自己表現するワークショップも行っている。これまでのべ2万組以上の親子、5,000名以上の助産師、医療者と専門家が参加している。また出産や子育てに関する相談事業も行い、母子が抱える様々な声に寄り添っている。「Umi」には、心と体の「膿を出す」、赤ちゃんを「産み育てる」、元気・夢・愛を「生み出す」の思いが込められている。

(推薦者：筑波大学 医学医療系 助教 福澤利江子)

この度は、第59回社会貢献者表彰に選んでいただいたこと、地道な活動に光を当てていただいたことに深く感謝を申し上げます。私どもが活動の対象としている人たちは、病気やしょうがいや生活困難など、特別な事情を抱えている人ではなく、いわゆる、見た目は普通の、一般的な暮らしをされている人たちです。しかし、生きづらさは、どの家庭にもあり、問題のなさそうなところに、問題があります。

社会は、人が「生まれる」ということから始まります。しかしながら、近年は、「妊娠しにくい」「産みにくい」「育てにくい」「人に助けを求めにくい」「愛しにくい」などなど、産み育てがより一層困難になってしまいました。SNSの発展で情報におぼれ、人に尋ねるより、携帯電話にかじりつく。子育ての感覚は、親から受け継いだものではなく、インターネットから流れてくる情報に操作されてしまうようになりました。

産むことも育てることも、理想どおりにはいきません。いつながおこるか、お天気と同じで、子どもという自然をコントロールすることはできません。それまでの社会活動で、時間通りや計画通りに暮らしてきた人にとっては、非効率な子育ては苦しいと感じることばかり。親の仕事は、子どもに安心を与え、健康を与えることです。ですので、まずは、親になった人に「安心とはなにか」「健康とはなにか」を学ぶ機会を提供していきます。

Umi のいえは、産み育てのいい塩梅をお伝えしていきます。がんばりどころ、手のぬきどころ、抱っこ、おんぶ、ごはんにお味噌汁。環境も人間も健やかに育む知恵を学びあい、日本の古き良きものを次世代に残していく活動をしていきます。

元気で優しい子どもがふえることで、手を借りる必要のある子たちを助けることが

できます。「また産みたい」「子どもがかわいい」と母たちが心底から湧き出るように思えたとき、その力は社会への還元にもひろがっていくと、私は思います。

世界平和の鍵は、戦士でも議員でもなく、母たちです。これからも、お母さんがお母さんであり続けられるよう、活動していきます。



▲小児科医堀内先生お話し会



▲おんぶで料理



▲おっばいの日スペシャルイベント



▲親子の休み場 Umibe カフェ



▲しょうがいがあるなごちゃまぜのイベント「しあわせのはじまり」

MJI ホールディングス株式会社



代表取締役
永杉 豊

東京都／ミャンマー

ミャンマーの民主化移管期間中の2013年から、ミャンマー現地の日本企業、在留邦人、そして日本国内の企業、商工会議所、銀行、国会議員、JICA、大手新聞や大学、ミャンマーレストラン等に向けて、ミャンマー現地の情報を、フリーペーパー誌、日本版「ミャンマージャポン」「英語版 MJ + plus」として、毎月届けている。(英語版 MJ + plus は情勢不安定により休刊) また、月曜日～金曜日の毎日、WEB版の「MYANMAR JAPON ニュース」を配信。現地の情勢や、現地駐在員や邦人、進出日系企業にとって、貴重な情報源となっており、信頼は絶大である。無料版と有料版があり、おおよそ、毎日10近くの記事を発信。現在、メディアやジャーナリストにとって情報の収集、発信が非常に困難な中、日々、現地の情報を届け続けている。代表の永杉豊さんは、困窮するミャンマー人のために、在日ミャンマー人や社会活動家、衆参国会議員らとともに「NPO 法人ミャンマー国際支援機構」を2022年6月に設立。人道支援と民主化支援の2つを柱に活動し「ミャンマージャポン」「MYANMAR JAPON ニュース」でも発信するなど、啓発活動を行っている。

(推薦者：一般社団法人 日本ミャンマー友好協会 会長 藤縄 善朗)

この度は大変栄誉ある賞を賜りまして、心より御礼申し上げます。この賞を通して、日本と関係の深いミャンマーで今起きている事実を広くお知らせできれば光栄です。

私はミャンマーの現地メディア MYANMAR JAPON を運営しています。しかし、私がいま入国すれば刑務所へ直行することになります。

2021年2月、軍事クーデターが発生しアウンサンスーチー氏をはじめとしたミャンマーの民主派議員らはその多くが逮捕・拘束されました。刑務所で拷問を受け殺害された党员も多数います。

現在でも、現地の情報収集や発信は困難を極めており、スタッフは命をかけて写真を撮影していると言っても過言ではありません。街中の至るところにいる軍兵士に万一見つければ、その場で逮捕・拘束されてしまうからです。

提携メディアのジャーナリストは国境地帯や隣国に逃れ、私たちにニュースを提供してくれています。しかし、逃げ遅れたジャーナリストの多くが今も刑務所に収監され、一部は拷問を受け殺害されたとも聞いております。

日本は過去、膨大な額の ODA (政府開発援助) をミャンマーに供与して来ました。それはミャンマーが民主化を実施し自由を得ることが前提条件でした。しかしクーデター後の現在、ある経済専門家は「国内各地の戦闘や治安不安、国際社会からの制裁、国内通貨の下落、外国投資の減少、外貨規制による輸出量の減少、インフレ率の上昇などマイナス要因しかない」と指摘しています。

この社会貢献者表彰は、今も命の危険を犯しながら現地の情報を日本へ送ってくれる弊社スタッフ、そして提携メディアのジャーナリストに贈りたいと思います。



「ジャーナリズムの基本は伝えることだけではなく、弱者の訴えを代弁すること」
だと思います。

私たちはミャンマーのメディアとして、これからも親日国ミャンマーの民主化のため
にニュースを発信して参ります。

最後になりましたが、皆さんに一つお願いがあります。どうか一人でも多くの方に
ミャンマーの今を知って頂きたく、私どもが配信している MYANMAR JAPON
ニュースをご購読くだされば幸いです。



▲ KNU のシェルターでスタッフと情報交換



▲ カレン民族同盟 (KNU) 中央執行部外務大臣ソー・トー・ニー氏



▲ スザンナ・ラ・ラ・ソー氏取材風景



▲ ウー・レー氏取材風景



▲ 国人統一政府 (NUG) 女性青少年児童担当大臣スザンナ・ラ・ラ・ソー氏